

月刊「近代建築」連載 「もういちど自然と建築について話をしよう」再読

近代建築社・主筆 永山 三男



池田 武邦 (いけだ・たけくに)

1924年1月14日 - 2022年5月15日

関東大震災の避難先であった静岡県で生まれ、その後神奈川県藤沢市に移り旧制湘南中学時代までを過ごす。40年海軍兵学校入学、43年同校第72期卒業。海軍士官としてマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、沖縄海上特攻の3つの作戦に参加し、最後の沖縄海上特攻で乗艦していた「矢矧」が撃沈されるも漂流後救助され生還。その後大竹の海軍潜水学校の教官となり終戦を迎えた。49年東京大学第一工学部建築学科を卒業。同年山下寿郎設計事務所（現・山下設計）に入社し、日本初の超高層ビル「霞ヶ関ビル」の設計に携わり、67年日本設計事務所（現・日本設計）の設立に参画。「京王プラザホテル」「新宿三井ビル」など超高層ビルを次々に手がけながら、新しい設計組織の構築を目指す。76年同社社長、92年同社会長。自然に対する畏敬を理念に「長崎オランダ村」や「ハウステンボス」などの作品を生み出している。1995年池田塾開設。2001年には長崎県西海市の大村湾に茅葺きの「邦久庵」を設けた。主な著書に『大地に立つ』『軍艦「矢矧」海戦期』『二十一世紀は江戸に学べ』『次世代への伝言』『超高層から茅葺きへ』『建築家の畏敬』ほか多数。

本年5月15日、私が長年にわたって敬服し敬愛し続けてきた、建築家の池田武邦先生が98歳で逝去されました。霞が関ビルをはじめ日本の高度経済成長を象徴する超高層ビルの普及に尽力されることで池田先生は、地震災害国である我が国の都市の強靱化と環境の質的向上に大きな功績を残されました。また、とりわけ自然環境に配慮した数々の作品は、効率化や合理主義が蔓延していた時代にあって、今日ではもう当たり前になった環境優先の建築が普及する先駆的役割を果たし、大きな原動力となったことはいまでもありません。池田先生は間違いなく稀有で偉大な建築家であったと思います。

そうした数々の優れた建築作品を紹介するなかで私たちは、池田先生の根底にある自然と人間に関する一貫した思想や建築に対するぶれのない姿勢、さらには私たち建築メディアに対する深いご理解と思いやりにも直に触れることができました。私が長年にわたり池田先生を敬服し敬愛し続けてきた最大の理由は、とりもなさずそうした私自身の体験があるからだと思っています。

私ども月刊「近代建築」は、こうした一連の建築作品を掲載するなかで池田先生の建築に込められた思いを紹介し続けてきましたが、すでに第一線を退かれた後の2014（平成26）年、池田先生が満90歳を迎えられた年に、先生のご厚意により渋谷・神山町のご自宅でお話を伺うことができました。残念ながらこのとき私は会社運営に忙殺されていて直接お話を伺うことはできませんでしたが、担当編集者の話によれば先生はいつものように優しく迎え入れ、メモも持たずになおも^{かくしゃく}響鑠として、月1回のペースで都合3回にわたって長時間のインタビューに応じていただいたと聞いています。

このインタビューの内容は、同年の弊誌7月号から9月号まで、「もういちど自然と建築について話をしよう」の連載タイトルで、第1回「日本人と自然災害」、第2回「人知と自然の力」、第3回「祈りと建築」として掲載し紹介いたしました。掲載以来私はこの連載をいく度となく読み返し、とくに会社の経営や運営のなかでさまざまな課題に突き当たったときは、池田先生の話によく耳を傾けるように心がけて克服してきました。それというのもこの連載には、多くの日本人が忘れてしまった私たち日本人としての本来の生き方や仕事への取り組み方、

そして困難なときには勇気を持って立ち向かうための、たくさんの貴重なヒントが込められていると思うからです。

この連載については、近代建築社ホームページ (<http://www.kindaikenchiku.co.jp/>) のコラムから閲覧可能ですので、読者の皆さんのなかでまだ読まれていない方はこの機会にぜひお読みいただき、またすでに読まれた方にもぜひ再読いただければと思います。以下に、連載のなかでも私がとくに関心を持って読み返している箇所を中心に、私と編集担当者が池田先生にお会いしたときの印象やエピソードなどを混えて紹介したいと思います。もちろん、私の拙い解釈などよりも引用する池田先生ご自身の言葉に耳を傾けていただくことがなによりも肝要です。なお、連載引用の文末の括弧内に、各回タイトルと小見出しを記載しています。

「日本人は長い間自然災害に繰り返し遭遇し、その度にあらためて自然の力を認識し、悲惨な記憶を克服しながら協力して復興してきた民族なのである。それは裏を返せば、元来日本人は自然を畏れ敬い、ときには自然災害ともうまく向き合いながら世代を繋いできた民族といえるだろう」(第1回「日本人と自然災害」東日本大震災の被災地)

「わたしたち人間が都市や建築を考えるオーダーはそれぞれの時代の生活環境と深く関わっている。太古の人びとや近代文明社会以前の人びとの生活は、現代に生きるわたしたちの生活とは根本的に異なっていると思っている。例えば、近代以前の人びとは、月の満ち欠けや自然の諸々の現象のなかで生き、日常生活そのものが大自然のバイオリズムの中に一体のものとして不可分であった。」(第1回「日本人と自然災害」都市形成と自然災害には深い相関関係がある)

「人間中心主義に支配されている近代社会では、都市も建築もみな時間的オーダーは人間の寿命が拠り所になっているように見える。(中略)。都市やそれを支えるあらゆる建築はもちろんのこと私たち人間を含むすべての生命は、大地や海といった大自然や宇宙のなかの地球に100%依存して成り立っていることは疑いのないことである」(同上)

連載インタビューのために担当編集者が池田先生のご自宅に伺った際、インタビューの途中で先生が「今日の東京湾の満潮は何時か知っていますか?」と訊ねられたことがあります。彼

はたまたま沖縄に住んだことがあり、地元新聞の一面にある満潮・干潮時の欄を毎日見る癖がついていたので、即座に言い当てることができました。それを聞いた先生は、東京に住んでいて潮の満ち引きを気にかけるとは素晴らしいととても喜ばれ、大いに褒めてくれたそうです。褒められた本人はもちろんですが、それを聞いた私も大変嬉しかったことを覚えています。それにしても、池田先生が常に自然の動きを感知しながら暮らしておられたことに改めて感銘を覚えます。

「自らの超高層ビルへの取り組み方が、正しい方向を辿っていると自負し始めた頃、わたしに天啓のような1つの出来事が起きた。(中略)夕方仕事を終えて1階のエントランスを出ると、いつも見慣れていた足元回りの緑が一面の大雪に覆われ、銀世界に一変していたのである。(中略)高層階が遮音されたうえに雲に覆われて見通せなかったとはいえ、表に出るまで降雪していたことにまったく気づかなかったことに、わたしは少なからず衝撃を受けた。かつて海軍時代に、あれほど人知を超えた自然の力を何度も経験したわたしが、最先端の技術ばかり追いかけてきて、人間にとって本当に快適な環境を技術だけで解決しようとしてきたことに、このときはじめて気づいたのである。(中略)わたしは自らが自然の感性を失いつつあることに、衝撃を受けたのである。」(同上)

これは連載インタビューのかなり前の話ですが、新宿三井ビルに就業時間を過ぎてインタビューに伺った際に、空調の吹き出し口から出ていた音が止まり、オフィスが静まり返ると池田先生が、「あなたは空調の音が気になりますか? 僕は空調の音が止まるとほっとするんですよ」と言われたことがあります。近代的な超高層ビルを手掛けてこられた池田先生が、最先端の空調機器に不満を感じられていることに少なからず驚いた記憶がありますが、インタビューの中の降雪の文を読めば、先生が人間にとっての快適な空間とは何かを常に探求されていたことがよく分かります。その後、先生が手がけられた超高層ビルに、外気を取り込む換気システムが果敢に開発され導入された実作を見る機会があり、そういうことだったのかと腹落ちし、人間の快適性を追求する建築に自然は欠かせないという、池田先生の一貫した取り組まれる姿勢に今も感銘を覚えるのです。

「私にはもう1つ自然の力をまざまざと見せつけられた経験がある。私は台風が日本に接近するというニュースを聞いた際に、1944年秋の太平洋戦争末期に、軽巡洋艦「矢矧」（排水量7,710トン）の航海士として乗り組み、海上戦闘以上の脅威となった台風に遭遇したときのことをいまも忘れることができない。」（第1回「日本人と自然災害」軍艦の艦首を引きちぎるほど大自然の力は強大）

「この写真が最も悲壮な体験を思い起こさせ、半世紀以上にわたってわたしを勇気づけてくれた最大の理由、それは「祈り」にある。（中略）。太古の昔から自然の力に畏怖を抱き、海神や山神、祖先神に祈りを捧げ敬うことで、人びとの暮らしの安寧を求め、神の技に近づこうと技術と文化を高め、神々に寄り添いながら国を発展させてきた、それが日本人である。その神々が、わたしたちの祈りにもかかわらず、敗戦というさらなる試練をわたしたちに与えた。肉体的・精神的苦痛にも増して、これ以上辛いものはこの世にない。そう理解したときわたしは、壁の絵画の代わりにこの写真を掛けたのである。（第3回「祈りと建築」戦後は「矢矧」最後の姿とともに困難を克服してきた）

インタビューにもあるように、池田先生の神山町のご自宅を訪ねると、まず目に飛び込んでくるのがこの「矢矧」最後の写真です。先生は矢矧の颯爽とした竣工時の写真ではなく、先生ご自身が急死に一生を得た「矢矧」最後の姿を日々眺めることの意味を私たちに丁寧にお話くださいました。設計事務所設立の頃の苦難をはじめ、様々な困難な課題に直面したとき先生は、この写真にご自身の、敷いては日本人としての使命を問い直し、自らを鼓舞されてこられたのだと思います。私も困難な場面に出合うたびに、この文章を繰り返し読むようにしています。

「日本の建築もまた同様に、日本の長い歴史のなかで培われてきた伝統や文化をないがしろにするようになり、家々や集落など国のいたる所にあった祈りのための「精神的空間」が失われていった。戦後復興期から新しく設計されたほとんどの戸建住宅や集合住宅、地域社会、都市のなかから、精神的空間が排除されていったのである。住宅からは神棚や仏壇、仏間などの先祖や物故者の霊を祀る空間が徐々に失われ、

地域社会からは森そのものに神が宿る「鎮守の森」や土地を護る神々のための聖域が消えていった。身の回りから精神的空間を失った人びとは祈ることをやめ、太古から脈々と受け継がれてきた土着の自然神や祖先神との濃密だった関係が断絶され、希薄な関係にすり替わった。（第3回「祈りと建築」神々に祈ることで日本の建築文化は質を高めてきた）

「身近な精神的空間を抛り所にして、日本人は子どものときからよりよいものを求めてきた。日本の伝統的な技術を持つ職人たちは、仕事の前には必ず神前や仏前に優れた作品を与えてくれるようにと祈ってきた。自分だけの技術力ではなく、自然に宿る土着の神々と一体となることで、自然や伝統の力を授かることができ、よい作品が生まれることを彼らは熟知しているからだ。（中略）身近な精神的空間を抛り所に神々に少しでも近づこうとすることで、文化はより高度なものになる。」（同上）

連載の最後に池田先生は、日本人が何代にもわたり受け継がれてきた精神的空間での自然と一体化した日本人独自の営みの重要性と、それを次代に繋ぐことの大切さを説かれています。私はこうした先生の次代への思いに強く共感し、近代建築をよりよい媒体にしたいと常に心がけるようにしています。

池田先生は、「私は建築家を目指したわけではなく、軍人がたまたま建築家になっただけなんだ」とよく笑顔で話されていましたが、池田先生は太平洋戦争と戦後の経済成長という2つの戦いの場を実際に体験された建築家であったと思います。昭和17年生まれの人にとってはおぼろげですが、海軍兵学校といえば日本を代表するエリート中のエリートであり、戦前の日本人の精神をしっかりと受け継いできた世代でもあります。その池田先生が私たちに語りかける「自然を畏れ敬え」「勇気をもって困難に立ち向かえ」という2つの言葉は非常に重いものがあります。私たちが決して忘れてはならない言葉であり、同時に次の世代にしっかりと引き継がなければならないことでもあると思っています。